

## 都市を反射する文学

—Roberto Arltの場合—

高 際 裕 哉

### 1. はじめに

筆者は東京外国語大学大学院総合国際学研究科にてイスパノアメリカ文学、とりわけ、アルゼンチン、ブエノスアイレスで生まれ、没した作家・ジャーナリストであるロベルト・アルト Roberto Arlt (1900-1942) の作家研究を行っている。同国の文学史の文脈では引き合いに出されることが多い作家ではあるのだが、日本では現在に至るまで、研究者の間で知られているだけで、作家の姿が詳らかにはなっていない。

アルトは、日本でも人気の高いアルゼンチン、ブエノスアイレス出身の作家、ホルヘ・ルイス・ボルヘス (Jorge Luis Borges: 1899-1986) とは同時代人の作家である。彼の地では今日に至ってもなお、ブエノスアイレスでは“BORGES VS. ARLT” と特集の組まれた雑誌を街場で手にすることができるほど、同国ではボルヘスとは対極的な作家であるというイメージが強く、大衆的にも比較的広く知られている作家である<sup>1</sup>。

ラテンアメリカ講座受講者セミナーでは、第一に作家が過ごした時代の歴史的重要性と特異性を明らかにし、第二に作家のバイオグラフィーを提示し、最後に、彼はどのようなテキストをものしていたのか、発表者によるアルトの短編小説の試訳から、作家のテキストが持つ特質の一部を具体的に提示することを目標に発表に臨んだ。

アルトの短編小説からは、当時のブエノスアイレスという世界的なコスモポリタンと変わりつつあった都市がはらむ喧騒や不安を読み取ることができるだろう。アルトは、移り変わる都市の諸相をある視点から切り取り、それを新聞のクロニカや小説にすることに長けた作家であった。世界でも稀に見る移民政策が取られた都市の変容は、同時代の世界で生まれたコスモポリタン都市と同期している点と特異な点がある。アルトが抽象し、テキストへと変えた「近代性」のモチーフを、地球の裏側の東京で、今日どのように読み取りうるのかここで論じてみたい。

### 2. Roberto Arltの名前とブエノスアイレスの文化状況

はじめに、Roberto Arltは名前を日本語でどのように表記するかが大いに問題な作家である。

日本語表記では、「アルト」、「アルルト」の二つが存在する。少なくとも、筆者がかつて調べた『集英社世界文学大事典』（刊行年は1996から1998に及ぶ）、『新潮社世界文学辞典』（1990）では「ロベルト・アルト」と表記されていた。ただ、近年では「ロベルト・アルルト」と記述されることが主流になってきているようだ。筆者も「アルルト」と表記することにしたい。カスティージャ語を外国語として学習したものにも読みづらい。父方の出身地、ポズナニ近辺に存在する苗字であるためである。

アルルトが新聞のクロニカ（コラム）欄に記名記事を掲載するようになった折、一つのクロニカで子供時代の事を振り返っている。小学校で、先生が子供たちの出席簿を読み上げる際に、“Arlt”の名前をどのように呼んでいいかわからず、「君、『それ』は何て読むのだね（『それ』というのが私の苗字です）」と言われた、というエピソードである。「私のせいではない（Yo no tengo la culpa）」と題された1929年3月6日付の日刊紙、*El Mundo*に収められているエピソードである（Arlt, 1998: 42-44）。この逸話は新興移民の子供たちが幼い頃多く経験されたことかもしれない。この名前の読み方すらわからない状況を経験したことが、アルルトを時代の寵児に変えたことは間違いない。

アルルトは1900年、アルゼンチンのブエノスアイレスで生まれ、1942年同都市で没した。当時のブエノスアイレスは、政府の国策と好況に支えられ、19世紀の末から1914年の第一次世界大戦勃発まで、ヨーロッパからの移民による爆発的な人口増加を経験した都市である。作家もそのようにヨーロッパからブエノスアイレスへと渡ってきた両親を持つ。父親は、現在のポーランド、当時のプロイセン・ポズナニ出身であり、母親は現在イタリア、アルルトはオーストリア・ハンガリー帝国の一部であったトリエステの出身だったと言われている。両親はどうかドイツ語で意志の疎通を図っていたらしいが、明らかになっていない点も多い。

当時、行政の言語はスペイン語であり、学校教育もスペイン流のスペイン語を習得させることが方針として掲げられていた。ブエノスアイレスに生まれつつあった特殊な言語も、現在書き言葉としても認知されている“voseo”の動詞の活用も、まだ公の言語としては認められなかった時代に、アルルトは生まれ育った。父親から受け継いだドイツ系の苗字が読まれなかったこともままあったことだろう。

一見、些末に思える作家の名前の表記と発音の問題自体が、アルルトが今日までアルゼンチンで読まれ、また議論の対象となる所以であろう。また、没後しばらくはアルゼンチン国内の作家としてしか知られていなかったアルルトも、近年はアルゼンチンの外でも研究や文学批評の対象となり、新たに注目を浴びている。この時代のブエノスアイレスの文化状況は、第一に英米資本の植民地構造の上にその繁栄を享受しており、第二に、繁栄する都市には主にヨーロッパからの大量の移民が押し寄せた。アルルトは経済的繁栄、そして移民たちの生活を構造的に作品に取り入れ、物語化する作家だった。

### 3. フィクションとアルルト

アルルトが没した後、彼の作品に対する再評価が起こった<sup>2</sup>。彼は公教育を小学校までしか受

けていなかったものの、幼いころから読み書きができたようだ。少年期から街場に流通する翻訳本、もしくは図書館の蔵書に読みふけり、フランス文学やロシア文学などを翻訳を通じて知っていたことは、アルルトのテキストでは何度かほめかされる。彼は、文壇に憧れた文学青年であった。1926年に 処女短編小説 *El juguete rabioso* を発表し、1928年に記名クロニスタになった後も短編小説の執筆は生涯にわたって続けていた。長編小説も1929年、*Los siete locos* (『七人の狂人』)、1931年 *Los lanzallamas* (『火炎放射器』)、をはじめ、4作品をものしている。

アルルトにはクロニスタとしての職業作家としての側面、小説という創作の領域で文筆活動を行う物語作家としての側面の二つの面がある。ただし、ある特殊な時代を生きた人物として持っていた新たなものや、時代に現れた特異な局面を抽象し、テキストに起こす力に長けていたことは、二つのジャンルを跨り読み取ることができる。その様相をアルルトが最も旺盛にクロニカを書き、またフィクションもものしていた1932年に発表された *La luna roja* (「赤い月」) と題された短編小説に着目してその性質を考察する。

#### 4. *La luna roja* 「赤い月」

本作品は1932年11月16日、雑誌 *El Hogar* に発表された。その後、短編小説集である *El Jorobadito* (1933) (『せむし男』) に再録されることになる。わずか7ページほどのこの作品は、同短編集のなかでは異色の幻想小説的な雰囲気を持っており都市に潜んだ集会的不安をとある不条理の中に描き出している。

この作品が、物語として動き始めるのは都市の大停電である。大都市を照らすために供給される電気が消えてしまうとどうなるか、という *La luna roja* の中で再現してみせる。

この作品の冒頭の2ページほどは、都市の記述から始まる。「午後、それが起こる気配は全くなかった。」(Arlt, 1996: 180) という一節がリフレインとして二回繰り返される。冒頭は都市の日常的な商業の取引から、街路での男女の愛をささやく場面が提示され、その中に、都市を覆う電線、鉄塔、摩天楼のイメージが時折挿入される。その冒頭部の記述は例えば以下のように記述される。

「(中略) そして、高電圧の電線を支える、緑色に塗られた鉄の高い十字架の遥か上の空は、たっぷり含んだ霞で空気が満ちているときはいつもそうであるように、灰色に染まっていた。

午後、それが起こる気配は何もなかった。

夜になると、摩天楼が光で照らされるのだった。」(Arlt, 1996: 180)

これら送電線、鉄塔、摩天楼のイメージは、間違いなく当時の映像的想像力から呼び起されたものだろう。ブエノスアイレスには摩天楼と呼べるビルがこの時代に存在したのかどうかは詳らかではないためだ。ただし、送電線と、それを支える鉄塔は、1930年代に電化したブエノスアイレスのどこかに存在していたはずだ。電気という新しい技術が、送電線を支える不気味

な鉄塔として表現される。

この部分で、空から摩天楼へと視点に移されたところで、再び記述は都市へと戻る。その記述は、当時、ブエノスアイレスで盛んに上映されていた映画の技術をテキストに織り込んでいることは間違いないだろう。記述は映画のカメラが高みから低みへと降りていくように展開される。そこから、都市の人々の記述は摩天楼の外資系の企業で働くホワイトカラーの人々の記述、そこから空中庭園さながらの高いテラスで音楽に興じる人々、またそのビルの高みの下には安い娯楽に興じる大衆が記述されている。都市の喧騒と享楽の様を描いている。

「高みでは、斜めの方向に、摩天楼の建物が、緑か黄色がかった空へと、大きいものから小さいものに重なって、立方体の浮彫を放っているのだった。このセメントでできたピラミッドの群れは、はっきりとは読み取れない光り輝く看板の明かりが消えると、姿を消した。そのあと、暗闇の中から青白い光が灯されると、新たに『超弩級戦艦』のように垂線を描きながら、海戦の戦々競々たる兆しを抱かせるような様相で、再びその姿を現した。奇妙な出来事が起こったのは、その時だった。」(Arlt, 1996: 181)

この記述は、夜のとばりがおりて摩天楼を照らしたされ、空にその影を落とさせていた商店の電光看板も灯りを消し、再び建物の明かりだけが姿を現した様を描いている。この後の「奇妙な出来事」、というのは、一つの筋立てに過ぎない。その摩天楼の中のホールで演奏をする楽団“la orquesta Jardin Aéreo Imperius”（『インペリウス空中庭園オーケストラ』）の第一バイオリン奏者が、『青きドナウ川』を演奏しようとする、使用人がメモ書きを彼に渡す。その直後に第一バイオリン奏者がメモ書きを読んだ後に舞台からいそいそと姿を消す、という事件だ。因果関係は明らかにされないが、その事件の後、劇場の明かりが消え、建物全体に停電が起こり、楽団員と観客たちが一斉に音も立てずに建物の外へ出る。すると、「他の摩天楼のドアというドアからもまた、押し黙った群衆が出てき」ており、「ほんの数分で、都市の住人達は通りに出ていた」(Arlt, 1996: 183)という事態が起こる。都市全体が停電に襲われ、住民たちは暗闇に包まれた通りへと出たのだ。そこまでは論理として合点がいく。街路へと出た人々は都市から行くあてを探す群衆 (multitud) となり都市をさまよう。そこにはなぜか虎や猿、馬、カバなどが混じり人々の先導をする。

「突然、摩天楼のセメントでできたタンクの上に、赤い月が現れた。垂直に浮き出た血まみれの目のようだった。みるみるうちにその月は大きくなっていった。都市もまた、赤く照らされ、暗闇の奥の方からゆっくりとその姿を大きくしていった。空の下弦があったほどの高さまで、テラスの手すり及びびたりくるほどだった。」(Arlt, 1996: 184)

この赤い月が群衆を照らす大きな光となり、群衆はその赤い月の光に照らされながらも、右往左往する。その際の群衆は、前述したとおり、押し黙ったままである。その点は続いての一文に明記されている。「何の音もしなかった、まるで朱色の光で人々の耳が聞こえなくなってし

まったかのようにだった。」(Arlt, 1996: 185) この群衆は、「実は歩いているわけではなかった。そうではなくて、後ずさりしているから進んでいたのだ」った (Arlt, 1996: 185)。

アルルト固有の語法ではないにせよ、少なくとも、この短編小説の中で描かれているのは、停電により都市の通りへ出て、群れとなりさまようばかりの、固有性を失った「群衆」に他ならない。この短編小説の前半では、都市の人々の階層性が提示され、近代の巨大建築、また電灯の光が提示される。しかし、その電気が停まり、都市が夜の暗闇に襲われ、赤い月がのぼると、人々はその階層性と名前や言葉を失い、動物も交わった群れの中を「群衆」として歩く。この人の群れ、「群衆」は、当時のブエノスアイレスで身近であった、都市の中心部に集まる人の群れから容易に想像ができた、現代的な都市の相貌の一つであるに違いない。

この作品は、都市を支えるインフラストラクチャーを停止させることで、人々のありようを群れへと変える作品である。作品の最後の箇所が、意志を失い群れと化した人々の滅亡をほめかし、作品は終わる。

「火のついた石油の海よりも激しく動く炎と暗闇に包まれたはるか遠く、クレーンの形をした鉄の建造物の台座の上で、ゆっくりとそれは動いていた。

斜めになった巨大な黒い大砲が空と大地の間に、円錐の輪郭をあらわしていた。それは自らの砲車を後ずさりさせながら炎を吐いていた。その長い轟音が、鋼鉄のシリンダーが動くとき空気をつんざいた。

赤い月の下赤く染まった摩天楼に囲まれて、群衆は驚きの声をあげた。

「戦争なんかしたくないんだ。いやだ、いやだ、いやだ。」

人々は今になって大火災が地球全体を襲っていたのだと理解した。そして、誰も助からないということ。」(Arlt, 1996: 186)

物語の最後は、巨大な大砲が目の前に現れ、街に現れた群衆を狙い打とうと待ち構えている様が描写されている。言葉を発しなかった群衆は最後に「戦争はいやだ」と絶叫し、物語が終わる。この戦争への恐怖は、すでに第一次世界大戦からの経験によって、少なくともヨーロッパでは共有されていたものであったし、同大戦がもたらした惨事は、場所を問わず芸術潮流に影響を与えていたはずだ。また1932年の時局、および新聞における世界ニュースのネットワークを考えると、新聞業界でクロニカをものしていたアルルトは、時代の流れを鋭敏に察知し、世界の全面戦争の危機を芸術潮流からのみではなく、電信によって届き、活字媒体としてブエノスアイレスで流通する世界中のニュースから直感的に捉えていた可能性は否定できない<sup>3</sup>。

実際にアルルトが携わっていたマスメディアの世界、また、彼が都市を歩き回ることによって経験的に直観していた要素、および当時ブエノスアイレスでは当たり前の大衆的な娯楽と化していた映画の要素の三つを虚構の中で組み合わせていたことが、この作品の中からは読み取れる。

この作品は、電化した都市を襲うカタストロフの可能性を示唆している作品である。はたして私たちはこの電化した都市に供給された電気が停まった場合、どのような体験をするか、とりわけ日本語圏の場合すでに経験済みのことであろう。彼は電化したブエノスアイレスの中を



駆けめぐり、その電化した近代社会を支えるテクノロジーの危うさを、物語を動かす要素として選んだ。この短編は、当時最先端であった近代技術の危うさとそこに潜む抑圧された不安を描く黙示録たろうとした実験的な作品であるということができる。

## 5. おわりに

アルルトは、アルゼンチンの、しかもブエノスアイレスという都市の喧騒を生き、その都市からテキスト執筆の刺激を受け、またテキストを都市に住まう人々に返した作家であったといつて間違いなだらう。文学作品の魅力はテキストそれ自体に書き込まれていることは間違いはないが、読解するにあたって、処々の文脈に大きく依ることが多い作家でもある。アルルトのテキストを、ジャンルは問わずに読んでみると、実際のブエノスアイレスの都市研究や文化論的側面には触れざるを得ない。またその点がアルルトの面白さである。アルゼンチンはもとよりヨーロッパにおいてさえ、いまだにアルルトに関する出版物は増えている。そのことは、当時のブエノスアイレスがヨーロッパ移民を数多く受け入れてきたことにも依るだろうが、1920年代から1930年代に世界中で一度花開いた大衆文化と、それが持っていた「モダンなもの」は差異をはらみながらも同期している。第一次世界大戦を経験し、第二次世界大戦に至る間の戦間期の不安もまた、表象されている。文化研究と文学研究の間を行きつ戻りつしながら、筆者はアルルトが知覚し、記述した「モダンなもの」を読み解いていきたいと考えている。それは、アルゼンチンの日本では評価されづらい作家の読解を進めるとともに、共時的なレベルで1920年代から1930年代の間（日本では太平洋戦争に突き進み、あらゆる前衛芸術が変容を被り、芸術が国家によって管理される時代と重なる）、世界的にはどのような文学が物されていたのか、世界的なレベルで大衆・前衛芸術の性質とその批評性に関する考察を進めていきたい。

### 〈註〉

- 1 ただし、ボルヘスとアルルトという対立は便宜的なものである。アルルトが長編小説としては初めての作品、“*El juguete rabioso*” (1926) を出版するにあたり、アルルトは当時アルゼンチンの文壇では重鎮であった作家リカルド・グイラルデス (Ricardo Güiraldes: 1886-1927) に文章の作り方から小説の作り方まで多くの指導を得ていた (Saitta, 2000: 33-44)。またアルルトは、クロニスタになる以前、グイラルデスの計らいで、ボルヘスも代表者として名を連ねていた文芸誌、*Proa*に数回短編小説を寄稿している (*Proa [1924-1926], Edición faccimilar*. 1a ed., Buenos Aires: Biblioteca Nacional, 2011)。クロニスタになる以前、アルルトは一応ボルヘスに近いところから創作作品を発表していた、ということになる。また、ボルヘスとアルルトは生前、敵対関係にあったわけではない。前衛的な文壇にいたか、新聞記事の場を公表の場としていたかは大きな違いであり、両者が接触した形跡はあったとしてもごくわずかなものである。
- 2 再評価の契機となったと思われる具体的な出版物は、ダビッド・ビーニャス、イスマエル・ビーニャス、ノエ・ヒトリック、アドルフォ・プリエトなど、現在アルゼンチンの文学史

を概観する際、参照せざるをえないテキストをものしている批評家たちが、1953年に創刊した雑誌、*Contorno*の第二号だろう。*Contorno No. 2: Dedicado a Roberto Arlt, mayo de 1954. Edición facsimilar*, Buenos Aires: Biblioteca Nacional, 2007

- 3 アルルトの戦争のイメージは、毒ガス、戦車、大砲、などの第一次世界大戦のイメージに規定されているが、これはひとえに時代的制約によるものであり、彼に先見性がなかったわけではない。近代テクノロジーがもたらすカタストロフのイメージは、アルルト作品の中に繰り返し現れてくる。とりわけ、この短編小説の前に執筆を終えた長編小説二編、*Los siete locos*, *Los lanzallamas*は、毒ガスによる首都制圧のテロリズムをもくろむ秘密結社の物語であった。

#### 〈対象テキスト〉

Roberto Arlt, *Obras tomoII : Aguafuertes*, Buenos Aires: Editorial Losada, 1998

Roberto Arlt, *Cuentos completos*, Buenos Aires: Seix Barral, 1996 (edición a cargo de Ricardo Piglia y Omar Borré)

#### 〈引用・参考文献〉

BORRÉ, Omar. *Notas a esta edición*, en ARLT, Roberto. *Cuentos completos*, Buenos Aires Seix Barral, 1996,615-633

SAÍTTA, Sylvia, *El escritor en el bosque de ladrillos: Una biografía de Roberto Arlt*, Buenos Aires: Editorial Sudamericana, 2000

SARGENT, Charles S.. *The Spatial Evolution of Greater Buenos Aires, Argentina, 1870-1930*, Tempe: Arizona State University, 1974

SARLO, Beatriz. *Una modernidad periférica: Buenos Aires 1920 y 1930*, Buenos Aires: Nueva Visión,1988

VIÑAS, David, *Posfacio*, en Roberto Arlt, *Cuentos completos*, Buenos Aires: Editorial Losada, 1998, 811-812

(たかぎわ ゆうや 本講座受講生、東京外国語大学大学院総合国際学研究所博士後期課程)